

保育内容の総合的な理解を目指した保育者養成の検討-「保育原理」と「保育内容人間関係」の科目間連携を通して-

著者	高橋 さおり, 清水 桂子
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	53
ページ	89-95
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001274/

保育内容の総合的な理解を目指した保育者養成の検討 ——「保育原理」と「保育内容人間関係」の科目間連携を通して——

Study of the childcare worker training aiming
at the general understanding of childcare contents

高 橋 さ お り 清 水 桂 子
Saori TAKAHASHI Katsurako SHIMIZU

I は じ め に

本稿は保育者養成課程における保育内容の総合的な理解を目指した科目間連携の実践報告である。保育内容の総合的な理解を目指すにあたっては、受講学生各々に対し、各科目内容の理解に加え、各科目相互の関係を的確に捉え、総合的に把握することが求められる。しかし、保育者養成課程を担う科目担当者として自らの授業を振り返った際に、担当科目の内容伝達のみならず、担当外科目等との関係について学生自身に気付かせる機会を保障していただろうかという課題が浮上した。そこで、こうした課題の解消を目指すべく、平成26年度本学こども学科1年生を対象に前学期科目として開講された「保育原理」（担当：清水）と「保育内容人間関係」（担当：高橋）において、連携した取り組みを行った。

この取り組みは、小川博久氏が『保育者養成論』（注1）で指摘している現在の保育者養成課程の問題点にも通じるものである。小川氏は同書で「養成課程のカリキュラムは、保育者養成のために構成されているにもかかわらず、各々の講義科目は各々まったく独立的であるかのように」行われており、「どんな講義科目の担当者であろうと、保育者養成の担当者として」「人間形成という点で他の担当科目に開かれた関心をもち、それらの相互関係を模索する責任をもつべき」と主張する（注2）。各科目間の相互関係を捉えることは、学生一人ひとりが保育に対する発展的な思考を行う契機となるものである。したがって、授業者は各科目内容の伝達はもとより、各科目相互のつながりを意識させ、総合的に理解するための思考過程を示す必要があると考えられる。小川氏の指摘はこの点を保育者養成課程の教員に強く求めているが、たしかに、授業者がこうした機会を保障せず、学生自身の能力に委ねるとすれば、それは学生自身の思考・判断する機会を阻むことにも繋がりがかねないだろう。さらに、矢藤誠慈郎氏は「これからの保育士養成の課題」を述べるなかで、保育士養成校の学生の実態について「資質や能力の幅が非常に広」いことを踏まえ、「基礎学力のみが保育者としての資質・能力を示すわけではない」ものの、「特に2年生の場合、学習習慣や学習レディネスの涵養と保育士の専門的な学修とを短期間で両立させ

ることを求められるという、極めて困難な状況にあるといえる」と指摘した(注3)。本学こども学科の現状もまた、こうした指摘に通じる部分があると捉えられる。

保育者養成課程の担当科目を担う教員として、幅の広い資質・能力を備えた学生に対し、2年間を基本とする養成期間の中で保育者としての専門的知識および思考力を育成しなければならない。本稿で報告する科目間連携の実践は、以上の問題意識に基づくものである(注4)。

II 科目間連携の目的と方法

II節では具体的な取り組みについて述べる。本実践は、本学こども学科1年生を対象としたものである。日程は平成26年6月16日～7月4日で、「保育原理」(127名)の第10講(6月16日)と「保育内容人間関係」(ABクラス43名, CDクラス42名, EFクラス42名)の第12講(7月2日, 7月4日)で実施した。保育内容の総合的な理解を目指すべく、保育者養成課程の入門期である1年次前期の段階において、まず身に付けさせたい力として、直接的な目的を〈科目間連携を通して、学生自身が各科目の学修内容の繋がりに気が付くこと〉とした。各科目の学修内容の繋がりはそれ自体が当然のことであり、本来は学生個々人の理解に委ねられるものである。しかし、はじめに述べたとおり、担当者の現状理解としては、各科目相互のつながりを学生に意識させるような仕掛け作りが必要であると考え、上記を目的とした実践を行うに至った。

また、本実践にあたって留意した点は、各科目で備えるべき知識や技能は本来全15回の授業を通して行われるものであることから、科目間連携の実践を行うことによって、そうした知識や技能の習得が保障されない状況を作らないことである。例えば、今回の連携科目である「保育原理」のねらいは〈めまぐるしく変化する現代の保育情勢のなかで保育ニーズが多様化していることに伴い、保育者に求められる資質や専門性の期待度が増していることを踏まえながら、保育とは何かと問いつつ、保育の基本を理解すること〉にある。「保育内容人間関係」のねらいは、〈近年、問題視されている人とかかわる育ちの問題(コミュニケーション能力や規範意識の低下)を踏まえながら、人と豊かな関わりを養う領域「人間関係」の幼稚園教育要領、保育所保育指針に示されるねらいと内容を学修し、乳幼児と密接にかかわる保育者に求められる援助のあり方について学ぶこと〉にある。先に据えた科目間連携の目的は、あくまで各科目のねらいの達成を前提としつつ、それと並行して進めていくものであることを踏まえ、本実践においては、共通の映像教材を用いる方法をとった。各科目の学びの中で、共通の映像教材を双方の授業目的に応じた形で視聴させ、学生自身に学びの繋がりを意識させようとしたものである。

本実践で使用した映像教材は、今井和子編著『遊びこそ豊かな学び 乳幼児期に育つ感動する心と、考え・表現する力』(ひとなる書房, 2013年)の付録DVD所収「自然物(水・土・砂)で遊ぶ」である。この映像は、福井県福井市の岡保保育園3・4・5歳児の遊びの場면을撮影したもので、同書巻末には以下の解説が掲載されている。

登園した子どもたちから園庭に出て自分の好きなところでたっぴりと遊びます。そこに

は当然、異年齢の交わりも生まれます。

追い立てられずにゆっくりと流れる生活の中で、水、土、砂にまみれて遊ぶ子どもたちの表情に注目してください。体も心も解放され、泥や砂に触れて遊ぶうちに、思い思いの発想（イメージ）が生まれ、そこに山をつくったり川を流したり、指で顔を描いたり……表現が生まれ、創造的な活動が展開していきます。

ある子どもは粘土をこねる彫刻家のように、ある子どもは山に穴を通す土木家のように……『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』という本がアメリカでベストセラーになりましたが、そこにどんな知恵が生まれていったのでしょうか。

以上のように、映像には3・4・5歳児が園庭で水、土、砂にまみれながら、思い思いに遊ぶ姿が映されている。子どもが遊び続ける姿が映された映像を用い、はじめに「保育原理」（第10講）の授業で〈遊びの場面から遊びの意味、こどもの育ちについて想像する〉ことを目的とした視聴を、次に「保育内容人間関係」（第12講）の授業で〈子どもが周りの人たちとの関わりを持つ姿を見取る〉ことを目的とした視聴を行った。さらに、「人間関係」（第12講）では、科目間連携の目的である〈各科目の学修内容の繋がりに気が付くこと〉の達成を目指した課題も行った。なお、この映像には子どもが遊ぶ姿のほか解説は一切入っておらず、また、いずれの授業においても先に引用した解説は用いていない。

各授業での具体的な取り組みは次のとおりである。初回の「保育原理」（第10講）では「遊びの場面から遊びの意味、こどもの育ちについて想像しよう」というねらいのもと映像を視聴し、課題①〔子どもの姿・遊びの場面の様子を挙げる（場所・使用用具・環境・年齢の予測・人数など）〕、課題②〔この遊びの面白いところはどのようなところなのか〕、課題③〔この遊びから、こどもの何が育つと考えられるか〕について、学生が自分の考えをワークシートに記述する方法で授業を進めた。なお、この時点で、後日同じ映像を再度視聴することは伝えていないため、本実践の意義は「保育内容人間関係」の二度目の視聴をもってはじめて明らかになる。「保育内容人間関係」（第12講）では、「子どもが周りの人たちと関わりを持つ姿を見よう」というねらいのもとに映像を視聴し、課題A〔第1講から第11講までの「保育内容人間関係」で学んだことを踏まえ、映像を視聴しながら領域「人間関係」に関わると思う点を挙げる〕、課題B〔課題Aで記述したことを相互に確認・評価しあい、自分の記述と比較・検討した内容を挙げる〕を行った。さらに、本実践の目的である〈各科目の学修内容の繋がりに気が付くこと〉に導くため、課題C〔「保育原理」と「保育内容人間関係」で同じ映像を二回見て取り組んだことへの自分の考えを記す。〕を行った。課題A～Cへの取り組みは、「保育原理」で視聴した映像を「保育内容人間関係」の観点から再び視聴することで、初回とは異なる視点で見ることが可能となることに気づき、さらに学生相互に評価を行うことで、新たな気づきを得ることを目指したものである。課題A～Cの取り組みもまた、課題①～③と同様にワークシートへ記述する方法をとったが、課題記入の際は、各自が「保育原理」で記入した内容を振り返る

ことができるよう、あらかじめ「保育原理」で記述した内容を添付したワークシートを使用することとした。なお、このワークシートは課題A～Cの余白を残し、「保育原理」課題①～③の記入済み用紙をコピー添付したものである。課題A～Cの問いは課題Cの指示を視聴後に提示することを意図し、あらかじめワークシートに記載せず、授業内で随時提示する方法をとった（本稿最終頁、指導案参照）。簡素なワークシートではあるが、科目どうしのつながりに気が付くことに注目すれば、不足のないものであると判断された。

「保育原理」ワークシート	「保育内容人間関係」ワークシート							
<p>学生番号 1- クラス 氏名 _____</p> <p>1) 遊びの場面から、遊びの意味、こどもの育ちについて想像しよう。</p> <p>対象児 ~ 歳児 「 _____ 」</p> <table border="1" data-bbox="252 768 762 992"> <tr> <td data-bbox="252 768 762 842">①子どもの姿・遊びの様子を挙げる。(場所・使用用具・環境・年齢の予測・人数など)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="252 842 762 916">②この遊びの面白いところはどのようなところなのか。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="252 916 762 992">③この遊びから、こどもの何が育つと考えられるか。</td> </tr> </table>	①子どもの姿・遊びの様子を挙げる。(場所・使用用具・環境・年齢の予測・人数など)	②この遊びの面白いところはどのようなところなのか。	③この遊びから、こどもの何が育つと考えられるか。	<table border="1" data-bbox="817 622 1348 1001"> <tr> <td data-bbox="817 622 1002 804">課題A</td> <td data-bbox="1002 622 1348 804">「保育原理」ワークシート 添付</td> </tr> <tr> <td data-bbox="817 804 1002 1001">課題B</td> <td data-bbox="1002 804 1348 1001">課題C</td> </tr> </table>	課題A	「保育原理」ワークシート 添付	課題B	課題C
①子どもの姿・遊びの様子を挙げる。(場所・使用用具・環境・年齢の予測・人数など)								
②この遊びの面白いところはどのようなところなのか。								
③この遊びから、こどもの何が育つと考えられるか。								
課題A	「保育原理」ワークシート 添付							
課題B	課題C							

Ⅲ 結果・考察

以上の実践を通じ、次の結果が得られた。科目間連携の成果があらわれるのは課題C（「保育内容人間関係」）の記述である。学生の記述からは、総じて、異なる科目でそれぞれの課題に取り組みつつ、使用教材のみが共通していること自体が、新鮮に受けとめられていた様子が共通して窺えた。なかでも「違う教科でやったことでも、いろんな教科につながっていることがあらためてわかった」「今日の授業を受けて、今受けている全ての授業が何らかのかたちで関わり合っているんだなということを実感しました」という記述からは、本実践の目的〈科目間連携を通して、学生自身が各科目の学修内容の繋がりに気が付くこと〉が達成されていることがわかる。また「何にでも観察する場合等は色んな視点から見るのが大切なんだと改めて思った」や「それぞれの授業でちがうことをやっているけれど、現場では全て一緒だと思うと本当に大変だと思いました」という記述には、抽象的ではあるものの、学生個々のレベルで、保育者に求められる資質・能力の必要性を実感する様子が見てとれる。さらに「保育原理の時は遊びに注目してみてもいいつもりだったけど、よくメモを見ると、子ども同士のコミュニケーションにも注目できていた」「それが今日どのように人間関係と結びついているかをもう一度よく考えられてよかった」とあるように、自身の記述を振り返り、反省的に学ぶ姿勢が見受けられる回答もあった。「遊びは、コミュニケーション能力も発達するし、友達づくりや協力する大切さなど、たくさんのことを身に付けることができる」「子どもの『あそび』はたくさんの意味とねらいが含まれていることを知りました」といった記述からは、この取り組みを通じ

て、あらためて「遊び」とは何かを自身の視点から捉えようとする姿勢が窺える。

以上のことから、本実践は科目間の繋がりや視点の持ち方という点において、学生の学びに対する自覚を芽生えさせる効果があったものと捉えられる。また、こうした新たな自覚を持つことが、保育者・教育者を目指す学生にとっては、あらためて「遊び」を色々な観点から捉えようとする重要な契機となったのではないだろうか。特に「保育原理」の課題①では、遊びの様子を挙げる項目で「場所」「使用用具」「環境」「年齢の予測」「人数」を具体的に記入させた。二度目の視聴である「人間関係」の課題を行う際には、この具体的な記述を手がかりとして、同様の場面を振り返り、そこに「人間関係」の要素が含まれていたこと、さらには、既に自分がそれに気付いていたことに気が付くのである。

必ずしも「保育原理」と「保育内容人間関係」の繋がりへの気付きばかりでなく、「新たな見方ができた」という感想に留まっているものも多いが、この実感が次の学びへの意欲喚起となれば、今回の取り組みは効果的なものであったと言えるだろう。こども学科の現カリキュラムでは、保育内容5領域の科目配置が、1年前学期「人間関係」、1年後学期「言葉」「総論」、2年前学期「環境」「表現」、2年後学期「健康」となっている。本実践が、1年後学期以降の「総論」および他の「領域」の理解においても有益なものとして機能することが期待される。

IV お わ り に

保育内容の総合的な理解を目指し、保育者養成課程の入門期の学生を対象に、科目間連携を行った。本実践を通じて、学生が個々に受講している科目間の繋がりに自ら気付き、それを通じて学生が各々の観点から「遊び」について考えようとする姿が見られたことから、この実践は一定の効果があったものと捉えられる。なお、この実践の意図は学生自らが科目の繋がりに気付く点にあるため、その後、両科目に共通したまとめは行っていない。この点については2年間の学びを見通した中で、学生にとって効果的であると思われる際に随時ふりかえる機会を設けたい。将来保育者・教育者として専門性を高めていくためには、学生が自身の学びを自覚的に振り返りながら思考する機会を設けることが重要であり、また、そうした学び方を養成段階で身につけることが必要だと考えられるからである。

先に引用した小川博久氏は、同書で『『保育』を学ぶ者が『保育』とは何かについて一貫したイメージと思考を確立するためには、保育者養成カリキュラムの総合性を確立することが必要』であり、それが『『保育者』の専門性に寄与すると考えるべき』で、「保育者が自ら実践を主体的に取り組み、反省的に保育を改善していく力」を育成するカリキュラムの必要性を説いている(注5)。また、谷川夏実氏は新任保育者の専門的成長を省察のプロセスから分析し(注6)、「彼らの専門的成長を支えるには、リアリティ・ショックの危機を自身の成長の契機に転換していくプロセスを解明し、そのプロセスに基づいた保育者への支援のあり方を追究することが求められている」として次の点を指摘した。新任保育者が省察を通して専門的成長を遂げることは、「直面している問題状況の問題の性質を理解し、具体的に取り組むべき課題を認識すること」が重要で、「自らが問題状況を自覚し、問題の性質を理解するまでには時間を要する」が、「そうし

た一連のプロセスを経ること」が「省察を促す上で積極的な意味を持つ」こと、そして「省察は、新任保育者が経験する危機を自身の専門的成長に転換させうる行為であること」等である。

以上の指摘から、専門職である保育者は「省察的实践者」(D.A.Schon)として自らの行為を振り返りながら成長し続ける存在であることを踏まえ、保育者養成課程には「反省的に保育を改善していく力」を備えた保育者の育成が求められており、そうした思考が学生自身のキャリアアップに繋がる点が、あらためて理解される。こうした育成を、「幅の広い資質・能力」を備えた学生対し、2年間の養成機関の中で行うには、どのような取り組みが効果的であるのだろうか(注7)。本稿では、保育者養成課程における保育内容の総合的な理解を目指した科目間連携の実践について、養成課程の入門期における一実践例に留まっているが、以上の問題意識のもとに、継続的な検討・実践を重ねていきたい。

注・参考

注1) 小川博久『保育者養成論』2013年4月 萌文書林,

注2) 注1) 11頁

注3) 「保育フォーラム」矢藤誠慈郎「これからの保育士養成の課題」日本保育学会『保育学研究』第52巻第3号 2014年12月

なお、ここでは保育士養成校の学生および教員の現状を踏まえ、養成段階と現職段階間のギャップをつなぐ取り組みとして、現場と養成校との連携や協働、さらには「養成校と保育現場が、保育士が育つ一貫したシステムとして機能するよう『融合』していくことが求められる段階に入っている」ことが指摘されている。

注4) 本実践は科目間連携の必要性を述べる点において「地域教材を活用した保育内容『領域』の融合型授業の試み」(菊地達夫, 大宮真一, 清水桂子, 高橋さおり『北翔大学短期大学部研究紀要』第52号 2014年3月 所収)と関連するものである。

注5) 注1) 208-209頁

注6) 谷川夏実「新任保育者の危機と専門的成長—省察のプロセスに着目して—」日本保育学会『保育学研究』第51巻第1号 2013年8月

注7) 注3)「保育フォーラム」「これからの保育者養成の在り方」(神長美津子氏)で指摘されるとおり、子どもを取り巻く環境の変化に伴い「保育の質の向上」が求められる一方で保育者養成が抱える課題も様々であるという現状がある。

参考) 広渡純子 讃岐京子「保育者養成カリキュラムにおける科目間連携(1)—「保育内容葉」と「保育表現技術」の連携—」聖和保育教育研究会『聖和論集』40号 2012年12月

附記) 本稿は「全国保育士養成協議会 第53回研究大会」(平成26年9月19日, 於 ホテルニューオータニ博多)における発表「保育内容の総合的な理解を目指した科目間連携の実践—保育者養成課程における入門期の学びから—」を基に再検討, 修正したものである。

資料「保育内容人間関係」第12講（映像視聴 2 度目）

	学習内容	学 習 活 動	時間	指導上の留意点・その他
導 入	前時までの復習 本時の目標	前時までに「共同」「協同」「協働」について学んだことを確認する。 映像資料を通して、これまでの「人間関係」の学びをふりかえりながら子どもの姿を見ることを確認する。	15	「保育原理」との繋がり等については、特にふれない。
展 開	本時の流れ・ 課題の説明 ワークシート配付	映像資料を見て、課題3点に取り組むことを確認する。はじめに2点の指示を聞く。 〔課題A〕 これまでの「保育内容人間関係」の授業で学んできたことを踏まえ、映像を視聴しながら領域「人間関係」に関わると思いうことを挙げなさい。 〔課題B〕 B, Aで解答したことを互いに確認・評価しあい、自分の解答と比較・検討したことを書きなさい。 ワークシートに課題記述欄A・B・Cを作る。	15	互いに評価しあうことも「人間関係」のテーマに広く繋がることを意識させる。
展 開	映像視聴 課題A 課題B 課題C	映像を視聴しながら、課題Aに取り組む。これまで学んできた「人間関係」の内容を、映像から見取る。 3～5人程度で相互評価し、課題Bに取り組む。互いに共通点や相違点を見つけ出し、記述する。 〔課題C〕の指示を聞く。 「保育原理」と「保育内容人間関係」で同じ映像を二回見て取り組んだことへの自分の考えを記しなさい。 課題Cに取り組む。 課題A・Bおよび「保育原理」での記述を振り返り、考えたことを記述する。 ワークシートを回収する。	45	※科目間連携のねらいとなる課題。
整 理	まとめ 次時の確認	映像資料を通して、これまでの「人間関係」の学びをふりかえりながら子どもの姿を見ることを確認する。 本時の学修を踏まえ、次時より子どもの人間関係をめぐる課題について検討することを確認する。	15	